地人論の系譜

——A. Guyot と内村鑑三——

辻田右左男*

Critical Survey of Two Essays on Earth-Man Relation

Written by A. GUYOT and K. UCHIMURA

Usao TSUJITA

(1977年9月30日受理)

はしがき

19世紀の中葉，1849年の1，2月にかけ，アメリカのボストンで12回にわたる地理学の公開講演が行なわれ，同年5月この講義がまとめられて The Earth and Man と題する1冊の書物になった．著者はフランス系スイス人ギヨー[1] A. Guyot であって，のちしばらく英語国民の間でひろく読まれ，地理学の古典の1つに数えられている．

一方，これより45年おくれた1894年（明27），日本で内村鑑三の『地理学考』が出現，2年後の1896年に『地人論』と改題されたが，これもかなりの反響を呼び，社会的に注目された．この2書に限らず，当時「地と人」「地人論」というような題名をもつ書物が，東西軌を一にして現れたのはなにゆえであろうか．

19世紀の前半，A. Humboldt とともに近代地理学の基礎を置いたといわれる C. Ritter が『自然および人類史との関連における地理学』Die Erdkunde im Verhältnis zur Natur und zu Geschichte des Menschen (1817–1818) を出し，そのころから地理学は従来のように地球とその住民を記述する学問から脱皮し，地球と人間の歴史との相互関係を追究することを主要な使命とする学問に変貌していった．そして，いわゆる地人相関に中心を置く地理学は19世紀の終りごろ，F. Ratzel の Anthropogeographie (1882–91) によってさらに前進し，総括されて，地理学は1つの新しい科学として容認されるに至った．人文地理学という名称もまたここから生れ，人文地理学は地人相関の学と定義されるようになった．

リッターからラッツェルに至る期間，すなわち19世紀後半から20世紀初頭にかけ，世界の先進国で刊行された地理書は，その多くがリッターの影響を受け，地人相関を端的に表現する「地と人」「地球と人類」「地人論」などの題名を冠して出版された．リッターの地理学については，わが国にも野間三郎[2]・水津一朗[3]・岩田慶治氏[4] らのすぐれた研究があり，いまさら贅しないが，リッター（1779—1859）の存命中にリッターと同工異曲の『地と人』を著わしたのが前記ギヨーである．

ギヨーよりすこしおくれて，アメリカ合衆国では Thomas Ewbank の『世界は仕事場，

* 地理学研究室

一名人間と地球の自然関係』The World a Workshop: or, the Physical Relationship of Man to Earth (1855) が書かれ，次いで Semple にも影響を与えた G. P. Marsh の有名な『人間と自然』Man and Nature: or Physical Geography as Modified by Human Action (1864) が出た．さらに20世紀に入ると N. S. Shaler がギョーの書名と酷似した『人間と地球』Man and the Earth (1905) を出している．一方，ヨーロッパでは，リッターに直接学んだ J. E. Reclus が『地と人』La Nouvelle Géographie Universelle, la Terre et les Homme, (1875～94) という19巻からなる大著を著わし，1905～08年にこれを圧縮16巻本の『人と地』L'Homme et la Terre を出した．前者は『地球とその住民』The Earth and Its Inhabitants (1878-94) の名で英訳され，わが国でも1930『地人論』（1943『世界文化史大系』と改題）という名前で一部分飜訳されたが，その訳者が原著者ルクリュー[5] と同じ社会主義者であり，かつ内村鑑三の万朝報社時代の同僚で，内村を尊敬していた[6] 石川三四郎氏であったことは奇縁である．

以上のように19世紀後半から20世紀初頭までにいずれもリッターの流れを汲む地人論数編が現われたが，19世紀の終り近くまだ系統的地理書の乏しかった日本に内村鑑三の『地理学考』が出現，空谷に跫音を聞く感があった．

THE

EARTH AND MAN:

LECTURES ON

COMPARATIVE PHYSICAL GEOGRAPHY,

IN ITS

RELATION TO THE HISTORY OF MANKIND.

BY

ARNOLD GUYOT,

PROFESSOR OF PHYSICAL GEOGRAPHY AND HISTORY,
AT NEUCHATEL, SWITZERLAND.

TRANSLATED FROM THE FRENCH, BY

C. C. FELTON,

PROFESSOR IN HARVARD UNIVERSITY.

Our Earth is a star among the stars; and should not we, who are on it, prepare ourselves by it for the contemplation of the Universe and its Author? KARL RITTER.

BOSTON:

GOULD, KENDALL, AND LINCOLN,

59 WASHINGTON STREET,

1849.

ギョー『地人論』の中扉（写し）

かつてアメリカ合衆国に留学，同国の地理学史に精通されている元学術会議会員渡辺光博士は，筆者が内村鑑三の地人論に関心を有することを知り，筆者と会談の際，判で押したように，ギヨー，内村両地人論の関連を筆者に語られた．渡辺氏は，内村の地人論（以下地人論Uと略記）はギヨーの『地と人』(以下地人論Gと呼ぶ）ときわめて類似し，ほとんど同内容である旨をくり返し言われ，これは2つの地人論を併読すれば明かに分ると付加された．

渡辺博士から筆者に贈られた近著『地理学概論』(1977）において，博士は日本の地理書としては珍しく，約4頁を費してギヨーを紹介されているが，やはり内村の地人論は，ギヨーのそれを祖述したと書かれている．祖述ということばを2回用い，ギヨーはリッターを祖述し，内村はギヨーを祖述したとし，リッター・ギヨー・内村という地人論の系譜を示された[7]．

渡辺博士との数回の談話の際，ギヨーの地理書は未見であったため，内村の地人論の originality をみとめながら，その時点では渡辺博士の祖述説を信ずるほかはなかった．ところが，1970年，およそ100年ぶりで，ギヨーの地人論がほとんど原型のまま飜刻され，筆者としてははじめて両地人論を併読する機会に恵まれた．

以下，これら2つの地人論を比較しながら，内村の地人論がギヨーのそれを祖述したものかどうか，そのことを検討してみたい．もしかしたらこれは祖述ということばの国語的解釈の問題に還元するかも知れないが，筆者としては内村の地人論はギヨーとは異質のものであるという気がしてならない．

両地人論の比較を試みる前に，それぞれの地人論の書かれた社会的背景を知る必要がある．そのため，まずギヨーおよび内村の小伝を述べてみたい．ただしギヨーについては，光と陰のようにギヨーに密着し，ギヨーを先導した大生物学者アガシ Louis Agassiz についてもあわせ考察しなければならない．

なお，細部における見解の相違はあっても，ギヨーにおけるアガシのように絶えず筆者を指導し，国際地理学連合の特別委員会のメンバーに，2度にわたり推挙して頂いた渡辺博士に敬意と謝意を捧げたい．

1. ギヨーの人と業績

地人論Gの著者 Arnold H. Guyot は1807年9月28日，スイスの西方ニューシャテル州のブーデヴィリェに生れた．ニューシャテルの collège を経て，1825年ドイツに留学，カールスルーエ滞在中[8]，生涯水魚の交わりを結ぶこととなった同郷のルイ・アガシを識った．アガシの家が父祖代々キリスト教の牧師であった[9]ことに刺激されたのか，ギヨーもこのころ聖職者になろうと決意し，ベルリン大学に入学して神学を修めた．彼は神学のほか，哲学・自然科学にも興味を抱いたが，地理学教授カール・リッターの講義[10]を聞くに及び，地理学こそ一生を托するに足る重要な学問であることに気付きはじめた．同じころ『資本論』の著者カール・マルクスもリッターの地理学の講筵に列していた[11]が，ギヨーとは全然別の針路をとった．

ギヨーはまた大地理学者A．フンボルトとも接触し，フンボルトから動植物採集の指導を受けた[12]．1835年ベルリンで学位を取得，つづく4年間は教師をしながら，パリで生活した．この間，アルプスの氷河を6週間継続して調査し，その報告書をパリの地質学協会に提出した．氷河の中の氷の成層構造を指摘したのは，氷河研究史上ギヨーが最初だったといわれる．

ギヨーの親友アガシも同じころパリに居住し，すでに魚類学者 ichthyologist として名を成していた．アガシはギヨーと同年の1807年5月28日スイスのモラ Morat 湖畔に生れ，ギヨーよりわずか4か月の先輩であったが，学問的にはギヨーの手が届かないほど早く有名となり，大成の域にあった．パリのカルチェ・ラタン区で極貧と闘いながら，魚類学のほか生物学・地質学のあらゆる分野を征服しようという野心に燃え，20歳代で早くも，19世紀屈指の生物学者となるべき資質の片鱗を示していた．なぜか同年代の生物学者 Charles Darwin (1809–1882) とは反りが合わず，終始犬猿の間柄であったことは有名である．彼の学識は地理学者フンボルトや当代随一の生物学者 Cuvier の知るところとなり，1832年これら2碩学の推薦で母校ニューシャテルの collège の教授となった．1838年この学校が大学 université に昇格すると，その翌年ギヨーを同じ大学に招き，歴史と自然地理学の講座を担当させた．

当時，アガシの熱中していたのは，すでに魚類の分類や魚の化石ではなく，大学の近くにのぞまれるアルプスの氷河の構造や運動に関する研究であった．アール氷河上に山の家 Hôtel des Neuchâtelois を構築し，アガシ，ギヨーその他の青年学者がここに合宿して氷河地形の究明に情熱を傾けた．これはまことに羨むべき学問的風景であったが，ついにアガシの学名は海を越えてアメリカ合衆国にも達した．1846年ボストンの Lowell Institute の公開講演を皮切りに，合衆国各都市に講演旅行を行ない，1848年ハーバード大学の動物学教授に就任を要請された．広い北アメリカは自然研究の宝庫であったから，アガシは合衆国に永住を決意し，この間1日を割いて合衆国第16代のリンカン大統領を表敬訪問している．わずか数か月間，しかも粗末きわまる丸木小屋の学校でしか就学経験のないリンカンが，この世界的な学者とどんな問答を交わすか，大統領側近は心配したが，リンカンは本に書いてない知識でアガシをあしらい，2人は子どものように嬉々として数時間を過ごしたという[13]．

アガシはアメリカに来ても，やはり旧友ギヨーを思う．1849年ギヨーを誘致し，彼自身アメリカで第一声をあげた同じローエル研究所の講壇に立たせ，地理学を講ぜしめた．このときの講義が基礎となって，前述のように地人論Gが生れた．1849年初版のあと，数回版を重ね，合衆国のほか，イギリスでも刊行を見，フランス語版もある．日本訳はなかったが，小藤文次郎博士が「サキニ独(ドイツ)ノリッテル氏アリ，又ペッシェル氏アリ，出デテ斯学（地文学）ヲ説キ後リッテルノ門下ニ瑞西ノジョー氏出テ去リテ遠ク北米ニ移リ，哲学的ノ地文書ヲ著述ス，今猶ホ本邦ノ痒序ニ於テ之ヲ教科書ト為スモノ尠カラス」[14] と記されたように，地人論Gは当時日本でもかなりひろく読まれたようである．

地人論Gの初版における著者の肩書は Professor of Physical Geography and History, at Neuchatel, Switzerland. となっているが，このころギヨーの属していたニューシャテル大学の学部の存続問題が起こり，学内におけるギヨーの位置が不安定になったという事情もあって，ギヨーはアガシを頼って合衆国に帰化することとなった．最初はマサチューセッツ州の教育委員会に籍を置き，指導主事として管内の教師に地理学と教授法の指導を行ない，教育者としても令名をとどろかせた．1854年ニュージャーシー大学（のち1896年プリンストン大学と改名）[15] の地質学および自然地理学の教授に任命され，1884年2月8日死没の日まで約30年間このポストを守りつづけた[16]．

彼の師リッターが大学における地理学講座担当の教授としては，世界最初（1830年，ベルリン大学）の人であったように，ギヨーもまたアメリカ合衆国における地理学教授の草分けとしての栄誉に輝いた[17]．しかしギヨーのよき友，彼の推薦者，後援者 promoter で

あったアガシは，僚友の晩年の活動を見届けることなく，ギヨーより約10年早い1873年に死没し，マサチュウセッツ州オーバーン山上の墓地に葬られた．アガシの墓標の傍にはスイスアルプス，ラウターアール氷河から運ばれた氷河石 boulder が安置され，Tyndall on Glaciers などの名著を残した稀有の氷河学者の記念となっている．当然のこととして，ギヨーは1883年親友アガシのために有名な回顧録 memoir を書いた．

アガシの華麗な学問的業績にくらべて，ギヨーの学業はきわめて地道に推進された．彼は数年間夏季休暇を返上して南北に長いアパラチア山脈を縦走，晴雨計を用いてジョージア州からメーン州に至る各地点の高度を測定し，ある意味で合衆国地形学の先駆者の1人となった[18]．また一時海底地形の調査にあたり，現在に至るまで彼の名前を記念したguyot（表面の平坦な海底山脈）という国際地理用語[19]を残している．さらにニューイングランド各地の気象観測を熱心に行ない，合衆国に国家事業として気象観測制度を発足させる原動力となった．その多角的な活動にもかかわらず，渡辺博士も指摘するように，ギヨーには学問上の後継者はなく，学者としてはやがて忘れられた存在になる．

しかし敬虔なキリスト教徒として，また誠実な教育者としてギヨーの名はいまでも合衆国で語り継がれる．彼は数種類の地理教科書，壁地図を編集し合衆国の地理教育を促進した．アガシも生前ギヨーに協力をおしまなかったが，2人して合衆国の科学教育理論を確立した．たとえば地理学・地質学の学習においては，テキストや教室内の授業が重要なのではなく，野外に行き，みずからの目で地物を観察し，その実態を把握することに重点を置くべきであるとした．一種のフィールド主義ともいうべく，これは数十年後ドイツから合衆国に帰化し，地理学は一にも二にも field であることを強調した C. Sauer の地理教授法に先行するものである[20]．

なお内村がギヨーを高く評価していたのも「カール・リッテルの崇拝家として，米国人の無頓着なるに関せず，三十年間孜々として地理教育新組織を伝布せしより，北米における今日の地理教育なるものは近来著しく進歩を現はし」[21] とあるように，地理教育者としてのギヨーであった．

2.　内村鑑三と地理学

内村鑑三（1861—1930）は，知名度の比較的低いギヨーとは異なり，近代日本の生んだ偉大かつユニークな思想家として有名である．内外人による数十の評伝・論文がすでに出ており[22]，文化人切手にもなっているぐらいであるから，いまさら改めて内村の伝記を跡づける必要はない．ここでは地人論Uの生まれる背景として，内村と地理学とのかかわりを追求すれば事足りるであろう．

内村はギヨーより約半世紀おくれた1861（文久3）に上州高崎藩家老の長男として江戸に生れた，幼時は故郷の上州で自然と親しんで生活し，家庭ではきびしい儒教的教育を受けた．13歳で上京3年間東京外国語学校で英語を学んだあと，1877年（明10）北海道開拓使を養成する目的で設立された札幌農学校（北海道大学の前身）に2期生として入学，同期生には新渡戸稲造，宮部金吾らがいた．後年彼の述懐によれば，内村は地理学者になろうとして農学校に入ったという[23]．少年時代はだれでも一度は地理学者になろうとする夢をもつといわれるが[24]，内村の地理学者指向はかなり現実的であり，彼のうちには地理学への憧憬と性向 bent が傾向的に内在していた．札幌農学校における3期後輩[25]の志賀重昂のような専門的な地理学者にはならなかったが「真理を恋ひ慕ふ誠意を以てすれば地理学は一種の愛歌なり，山水を以て画がかれたる哲学なり，造主の手に成れる予言書なり」

内村鑑三

と地人論Uの冒頭でみずから定義したその地理学を一生を通じ愛しつづけた．

農学校在学中に内村はキリスト教徒となり，また入学時の志望を転じて水産学で身を立てることを決意する．教師の大半がアメリカ人で占められた札幌農学校の図書室には，当時アメリカで流通していた標準的な科学書や教科書類が多数置かれており，内村はこのなかにアガシの魚類学の書物を見出し，これが1つの動機となって内村を水産学に走らせたと思える節がある．農学校卒業後農商務省水産課に勤務し，現在でも高い評価を得ている「日本産魚類目録」(約600種）を作製[26]したのも，約半世紀前，アガシが出版した「中央ヨーロッパ淡水魚自然史」[27]に範を求めたとも考えられる．内村がアガシを学問の先達の1人としていたことは，内村の著作のなかにしばしばアガシの名が出てくることから，その一端がうかがえる．

1884年（明17）内村は妻の背信で打撃を受け，その傷を癒すべくアメリカ合衆国に渡り，最初の8か月間はペンシルヴァニア州の少年白痴院の看護夫として試練に満ちた生活を送った[28]．この年は奇しくもA．ギョーが死没した年であったが，その時点で内村がギョーを意識していたか，どうかは明かでない．翌1885年同郷の新島襄[29]の紹介により，マサチューセッツ州西部アマスト大学の給費生となり，ここで地質学・鉱物学・史学・ドイツ文学・聖書文学を学んだ．

アマスト大学における内村の最大の収穫は総長シーリーから信仰とは何かを教えられたことで，これは一生を通じ彼の精神的支柱[30]となった．学科のなかで彼に深い感動を与えたのは史学と地質学であった．講義の1つ1つが問題提起でもあった Morse 教授の世界史の講義は彼に史学の真髄をささやいた．これは歴史的な新しい天啓であった[31]と彼自身書くように，死骨のように彼の脳中に埋没していた歴史的事実は1つの組織のもとに整然と，一幅の活画として彼の前に展開され，地理と同じように歴史を読むことは彼の終生の快楽となり慰めとなった．

彼は帰国後「史学の研究」[32]（1896）を書き，また多数の外国文献を消化して未完の名著『興国史談』[33]（1900）を著作，歴史家としても非凡な才能を発揮した．とくに日本の政治・殖産・農業経済・儒学・仏教に貢献した5人の偉人（それぞれ西郷隆監・上杉鷹山・二宮尊徳・中江藤樹・日蓮）をえらび150頁に近い英文の伝記 Representative Men of Japan (1908) を書いたことは日本の史学史の上で注目されてよい．この書物は直ちにドイツ語・デンマーク語に飜訳され，ヨーロッパでも非常な反響を呼び起こした．史家大久保利謙氏は彼を日本史学史で問題にしないのはふしぎである[34]と言っている．

内村のアメリカ留学中のいま1つの収穫は地質学[35]のよき指導者に恵まれたことである．地質学の教授 Emerson は「自然をして彼女自身の教師たらしめよ」というアガシ[36]，ギョーの即物的現地主義的教育法の忠実な実践者であったらしく，ルコント，デーナの地質，鉱物書を用いはしたが，これらに重きをおかず，内村ら学生を率いて地質鉱物の現地指導を行なった．そのため内村は「アマスト近郊十哩の地にして地質学的に興味ある場所にして跋渉せざる所は少なし」[37]と豪語できるほど地質学の知識が豊富になった．また，この

ころの地質学巡検の一日，マサチューセッツ Holyoke 山頂において地理学者フンボルト自筆の碑文 Alexander von Humboldt, In Deutschland geboren, Ein Bürger der Welt,「ドイツ国に生れたる世界の市民アレキサンダー・フォン・フンボルト」を見出し，深い感動に襲われた．内村が後年，口癖のように唱えた「世界の市民」ということばは，このとき彼の脳裡に刻印され，地理学の目的は世界の市民を作ることであるという思想に発展した．

1888年（明21）4年間のアメリカ留学を終えて帰国，2年後旧制第一高等学校の講師となり，歴史を教えたが，翌1891年1月例の不敬事件で講師を辞し，東京にもおられなくなって各地を転々する．方々の学校で地理・歴史・英語等を教えたが，長続きせず，92年結婚した三度目の妻の実家のある京都[38]に来，ようやくここに安住の地を見出した．以後，3年間精力的な著作活動に入るが，その処女作は，アメリカ発見400年を記念した『コロンブスの功績』(1892) であった．同じ年横浜英字新聞に Japan: Its Mission[39] を寄稿したが，彼はこのなかで日本の地理学上の位置ならびに形状について述べ，近代人文地理の始祖リッターと，そのスイス人の弟子ギョーの地人論を紹介しながら，かれらの書物から示唆をうけ，日本の天職は「東西両洋の中裁人[40]媒介者」となり，アジアを弁護し，西洋文化の紹介者 (harbinger) となることであると結んだ．このときすでに地人論の構想は成り，これを彫琢して2年後『地理学考』として発表された．

京都の旅寓で支那鞄を机の代わりにして書いたというこの書物は決して啓蒙書ではなく，日本の地理書としては最初と思われる20余の外国文献を参考書目としてあげ，当時の知識人の目を見張らせた．

『地理学考』は，内村33歳の作品（地人論Gはギョー42歳の作）であり，同じ年に出た志賀重昂の『日本風景論』[41] 同様青年の覇気が感じられる．2年後，第2版を出すとき，友人新渡戸稲造などの助言により，彼としては不本意であったが，ギョーの著書からヒントを得た『地人論』に改名した．第2版の序で「余は久しく本書の改題に躊躇せり，然れども二三親友の勧誘に従ひ，つひに先哲アーノルド・ギョー氏の著書に倣ひ，その名をかりてこの書に附するに至れり，勿論彼の優此の劣は余の言を待たずして明かなり」と内村が書くように，しぶしぶ題名を変更したのである．名は借りたが，実態はギョーのそれとは違うのであるという内村の反骨精神がこの自序の言外に溢れている．ギョーにくらべ優劣は自明であると記したのも，儀礼的な謙辞というより，始めから質が違うのだから比較に価しないことを示唆しているように思われる．しかし，文中5～6箇所でギョーのことばを引用し，その6大洲山脈図はギョーの地文学によったとあとがきでことわっている．

『地理学考』初版の表紙

たしかに内村の地理書としては地人論Uがあるだけで，彼のみのり多い著作[42]の標題に地理の文字は見出せない．しかし折にふれ，断片的に発表した小国地誌は相等の数に上り，とくに明治の日本では疎外されていた北欧[43]・中近東・中央アジア・アフリカの諸地域の地理に国民の注意を向けた．もちろん，それら知られざる土地で行なわれている世界的大事業，そこに活

動する偉大な人物の紹介も忘れなかった．

20世紀以後約30年間の彼の後半生は，集会および文書を通じての聖書研究に集約される．しかし，こうした精神的活動と平行して依然地理学への生涯的熱愛と関心とを持続した．少数の地理学者以外はほとんど手にしなかった英文地理書・探検書・地図類を読み，数種類の英米地理学雑誌[44]を購読して，世界地理の最新の情報を把握することを怠らなかった．彼の集会の聴衆や，彼の死去までつづいた月刊個人雑誌「聖書乃研究」の読者のなかには，キリスト教そのものよりも，彼から地理的知識を期待する者も少くなかったという．

世界各地に散在する彼の信者から寄せられる情報によって，居ながらにして世界を達観し，世界諸地域に関する地理的知識は，ときどき世界を周航する船長たちを上回るもの[45]があった．内村はしばしば世界大ということばを用いたが，世界の1つの地域を部分的に知ることで満足しなかった．常に世界的な視角 angle mondiəl で地球上の事物を眺め，彼の許に集いよる知識人にこのような姿勢を植えつけた．一言でいえば内村は遠くプラトンに発し，リッターによって強化された「部分の本質は全体の把握によってのみ理解できる」という最もオーソドックスな地理的世界観の持主であった．第一高等学校不敬事件のあと，彼は非国民という烙印を押され，「天が下に身を措くことを得ぬまでに窮迫した」[46]が，当時からみずから愛国心において人に劣らずと自認し，一生を通じ彼の愛した2つのJ[47]の1つは Japan であった．その Japan も内村晩年の門下大塚久雄氏によれば，「霞のかなたにあるような抽象的なものではなく，内面においてこの日本の平民という具体的なものに繋っていた」[48]．地人論Uの眼目も第9章「日本の地理とその天職」にあって，地理学という衣にくるませた彼の愛国心，nationalism の発露が地人論Uであったかも知れない．

3. 2つの地人論の特色と関連

ギヨーの地人論は前述のように，「人類の歴史に関連した比較自然地理学」という副題がつき，さらに題名の下部に「惑星の1つである地球の住民は宇宙とその創造者とを深く洞察しなければならない」というリッターのことばが記され，開巻第1頁から著者ギヨーが如何に忠実なリッターの follower であったかが知られる．もちろん文中しばしばリッターに言及し，この大学者とか歴史地理学の創設者などのことばで称讃し，大陸の地形や群別 grouping においてリッターほどの卓見はだれももたなかったとほとんど手放しでリッターを持上げる．

渡辺博士が指摘されたように，地人論Gの「内容はきわめて忠実に，リッターの地理学を祖述したものであり，特にその目的論は師にも増して，敬虔な信仰心に裏づけられて，自信に満ちた筆致で強調されていたから，当時のニューイングランドのキリスト教的風土に受け入れられやすかったものと思われる」[49]．たしかにニューイングランド地方の紳士淑女にとっては，ヨーロッパの自然地理学の粋を集めた最新の知識と，世界は白人種のために造られたことをほのめかすような甘美な摂理論とを織りまぜた彼の講義はこの上なく貴重なものだった．思慮の円熟した42歳のギヨーが，淡々と，いろいろな図表を示しながら，流暢なフランス語（書物はハーバード大学教授 Felton の英訳）で語りかけたのであるから，ヨーロッパに郷愁を感じているボストンの市民は，厳寒を物ともせずこの会堂に集ってギヨーの講義を傾聴したことであろう．もちろん紹介者であったアガシも臨席してギヨーの講演の成功を念じていた．

ボストン講演は成功したが，時代はリッターを後目（しりめ）にかけて前進を示してい

た．ことにリッターに輪をかけたギヨーの目的論的地理学は，アメリカ地理学の新時代の戦士 W. M. Davis (1850–1934) によって，こっぴどく批判された．デーヴィスも地人論Gの冒頭にある「原因に溯ることなく，結果に流入することなく，人間が目撃した1つの事実だけをいとも簡単に結びつけて論じるのは科学でもなければ，地理学でもない」ということばは地理学の指導原理 guide[50] として，彼の論文に再三引用し推賞しているが，全体として「地理学はいまやギヨーの考えている地理学よりはるかに前進している」[51] という批評でギヨーを突き放した．また地理学者 J. K. Wright も現在の地理学界ではタブーとなっている地理的敬虔論 Geopiety, 地的神学，地的目的論を19世紀中葉のアメリカ地理学者とともにギヨーが涼しい顔をして称えていたと酷評している[52]．要するにギヨーの地理学はあまりにもリッターを墨守することによって，19世紀後半の近代的地理学の潮流に乗りえなかったのであろう．

地人論Gはもともと講演の集録であるから，科学的地理書としての体裁はなく，索引もなければ，章別の題名 heading もついていない．その代わり，各講ごとに10ほどの摘要的な小見出しが付してあるが，第1講は地理学の定義を含む序論，2～9講は純然たる自然地理で，地球の起源から大陸の形状，山脈の走向，海洋，気候，植生に至るまで，実に丹念な説明が200頁にわたって述べられる．やや冗長な自然地理の解説が終ると，ここにはじめて地人論Gの核心部分が登場する．10講の後半に世界の代表的人種16を示す素朴な肖像画が挿入され，人種の分布と分化の原因，人間に及ぼす気候の影響が説明される．最後の2章は歴史の舞台としての北方大陸から始まり，今日言われる南北問題の萌芽的記述がみられる．またトインビーなどの説を想起せしめるような東洋と西洋との比較，文明論，文化の停滞，社会組織の発達など，前半とは一転し人文地理的色彩が強くなる．12章は全巻の総括で，まさに目的論の名に価する哲学的な教説である．歴史の地理的行進 the geographical march of history ということばを用い，原始社会から始め，奴隷制，ギリシア，ローマの文化を分析し，キリストの生誕が歴史の流れを変えた大きな世界史的出来事であるとする．地中海地域からキリスト教とともに文化が北漸し，全ヨーロッパが1つの文化圏に統合される．やがてアメリカの発見となり，従来歴史にみられなかった社会事業がこのころから始まり，アメリカはその完成者となる．将来の文化はアメリカ人の双肩にかかっているが，その前兆はいかにして認識さるべきか．南北問題を解決するには，優秀な国民は弱少民族に対し責任をもたなければならない．信仰が科学によって，みがきをかけられ，深化され，信仰と科学とが結合，調和することによってのみ将来の世界的諸問題は円滑に解決されるであろう．新しい人類救済の Vision はここから生れる．

12講の結論部分は，地理学者の発言というより，宗教家的あるいは哲人的なひびきがある．ギヨーはリッターよりさらにさかのぼるカントの地理哲学を合衆国に導入する channel となった[53] という見方もあり，小藤博士が哲学的地学者と評したのも当を得ている．淡々と進められてきた自然地理学の講義が，終章に来て爆発的な高まりを見せ，聴衆ならびに読者を幻惑したと言えるであろう．

ギヨーにはこの地人論のほか，内村も参考書目の一つにあげている『自然地理学』と『天地創造，近代科学より見たる聖書の宇宙創成説』Creation, or the Biblical Cosmogony in the Light of Modern Science (1884) があるが，ここでは論外とする．

ギヨーの地人論より約50年おくれて出現した内村の地人論Uは，地理学そのものとしてはギヨーの地人論とかなり径庭がある．内村が「ギヨーの優内村の劣」は自明のことであると書いたのは，地理書として両者を比較した場合当然のことである．目的論的であると

はいえ地人論Gは，長期間の準備と熟考によって整然と arrange されたみごとな地理書であり，ギヨーの学識と誠実な人格を反映している．はじめてアメリカから招待され，このため多少アメリカに阿るような発言がなくもない．また温帯地域の住民は常に知性，活動の人であり，人類の brain であるが，熱帯住民は常に hands であり，働き手であり，勤労の息子たち sons of toil であるなど甚だしい人種差別的な記事もある．北方大陸の住民は指導者 leader として造られ，南方3大陸の住民はその補助者 aids となるべく運命づけられている．白人こそ人類のうち最も純粋であり，最も完成されたタイプである．このように，部分的に前近代的な偏見があるにせよ，地人論Gが発刊後しばらくは，当時のアメリカとしては珍しい体系的な地理書として知識人の歓迎をうけたことは事実であろう．

これに反して内村の地人論は，『地理学考』といういかめしい鎧をつけて明治20年代に登場し，知識人にも一般大衆にも正真正銘の地理書として受けとめられた．しかしいかなる意味においても，内村地人論はギヨーのそれとは全然質が違う．ギヨーは端然と落ち着きすました一人の紳士が静かにささやいている姿にたとえられ，内村のは，弊衣破帽の書生が月に向ってうそぶいている姿にさも似ている．ギヨー地人論はとにもかくにも講壇的地理学と言えるが，内村のは強烈な主張，地理学を手段とした一種の呼びかけ innovation ではなかったか．

地人論Uの冒頭の地理学の定義からしてすでに型破りなのである．内村は前述のように地理学を愛歌であり，哲学であり，予言書であるとする．これは内村のさきにも，あとにも日本では全然見られなかった粗野 rough な概念規定である．小心の地理学者の発想の枠外にある乱暴な定義と見るよりほかはないが，それにもかかわらずイギリスの地理学の巨匠マッキンダー卿やスタンプ卿の定義と大綱において一致している．筆者も2，3度対談した故スタンプ卿は「地理学は科学であり，哲学であり，そして芸術である」[54] と記しているが，スタンプよりも50年以上以前に内村はほぼ同じ発想で地理学を把えていた．

明治期の学者の博引旁証は内村に限ったことではないが，内村のそれは絢爛多彩で，地人論Uの第1章「地理学研究の目的」20頁のなかに引用されている人名の数は，ギヨーの地人論全巻310頁のなかに見出せる学者名の数より多い．ギヨーの引用人名は地理学者・地質学者・気象学者に限られるが，内村は地理学者のほか，政治家・軍人・哲学者と人をえらばず，また古今，洋の東西を問わずきわめて恣意的に先人のことばを引用した．試みに第1章における引用人物名を登場順に記せば，バスコ・ダ・ガマ，ルーテル，吉田松陰，ヘロドタス，アレキサンドル，シーザー，ナポレオン，チャタム，モルトケ，リッター，ゲーテ，孟母，ボルン，ミルトン，林子平，バイロン，シルレル，ウォルズウァース，イブセン，ビョルソン，ラマーチン，王陽明，ダーウィン，スタンレー，福島中佐，スペンサー，フンボルト，ペッシェル，ギヨーとなり，これだけで一般地理書から逸脱していることが知られる．しかし同時に内村はいかにもして，国民に地理学の重要さを認めさせようとして，広い視野から地理学の位置づけを意図したのである．

12章のうち，第2，第3の2章を割いて地理学と歴史のかかわりを述べ，とくに地形が歴史に及ぼす影響を述べる．しかし環境論者と呼ばれたイギリスの Buckle や Draper のような機械的な地人相関に陥りたくないとみずからいましめている[55]．B6版230頁の全巻を費して内村が唱える地理学は，さきに述べた彼の地理学の定義と背馳しない．もちろん「真理を恋ひ慕う誠意を以てすれば」という条件がついているが，こういうまじめな探究者にとっては，地理学は一種の愛歌，すなわち芸術でもあり文学でもある．このことを示すため，内村は内外の詩人による詩を多用する．かなり長編の詩を英語またはドイツ語

の原文のまま引用し，個所によりその日本訳は略されている．

だから多少とも外国語の素養のない読者にはこうした文学の引用部分は十分に理解できなかったであろう．地理書に多くの詩歌を引用するのは，科学的地理学にとって邪道のように，日本では現在でも思われ勝ちであるが，欧米地理学者の筆になる地理書には日常茶飯事的に詩文の引用があり，この点われわれの反省が要請される．外国文献を自由に馳使することができた[56]内村は，地理書に詩文を多用することになにら抵抗を感じなかったであろう．

「一種の愛歌なり」という定義につづく第2段として，内村が述べた「山水を以て画がかれたる哲学なり」ということばにも地人論全体が対応を示している．巻末の参考書目として内村が掲げているヘーゲルの歴史哲学とリッターの思想が根幹となっているが，他の哲学者・思想家からの引用も多い．内村は1つの思想をもって地球上諸地域・各国の位置・地形・文化・社会をながめなければならないと主張する．またリッターの地理学の特色の1つであった比較地理の手法も随所に試みている．

最後に地理学は「造主の手に成れる預言書」とあり，これは現代の読者にとっては，絶対許せない19世紀的後遺症であるかも知れない．この点では50年前のギョーの地人論から一歩も前進していないかのように見える．第4章にわざわざ「地理学と摂理」という章を設けているのは科学的地理書としては致命的瑕瑾と受けとめられるであろう．しかし意外にも，内村はここで一般に神意または摂理と訳されている providence ということばは，1つの意匠 design であると説明する．換言すればこの世界は神という偉大な designer が丹青をこめて作りあげた一つの芸術作品とする見方である．筆者の畏友元エール大学教授 Jones 氏はかつて，Enjoyment of Geography[57] という論文の結論として，この秩序ある美しい世界を創造したという神はあるいは地理学者であったかも知れないという含蓄のあることばを残したが，内村がここで語りかけようとしたのも，Jones と同じように大陸の分布，相貌，山脈の走向が人間に対し十分意味があるということである．

しかしこの章はギョーを意識しすぎたためか，内村らしくなく，精彩を欠いている．「地の目的は如何」と自問し，ヘーゲル以下4人の哲学者の説をつらねているが，力量感がない．いわゆる目的論が粗雑につめこまれた密室の感があり，内村地人論のむなしさを誹謗する人たちへの好餌となっている．

第4章「地理学と摂理」が内村地理学の陰惨な谷間とすれば，第9章「日本の地理と其天職」は闊達たる平原であり，峨々たる山頂である．内村はこの章一章に彼の学問と至誠のすべてを賭けた．東西両世界の fringe に位置を占める日本は，東西両文明を吸収昇華して新しい文化を創造，これをふたたび東西両世界に伝達せねばならない．地理学的に見た日本国の天職は東西両洋間の媒介者となることである．この結論に達するために，日本の地形，日本の地質構造を世界の諸地域と比較し，その上でリッター，ギョー流の歴史的考察が加えられる．延々30頁にわたり，分量的にも最も多いこの章は「さし出る朝日の本の光より高麗もろこしも春をしるさん」という平賀源内の歌で統括される．地人論Uの自眉であり，圧巻であったこの章は明治の青年たちに感動をもたらし，いまさらのように日本の地理的位置の重要性を日本人に認識させた．

残余の5章は世界の各大陸の地理の特色を論じたものであるが，ギョーが露骨に表明した各大陸の文化格差はここでは取り扱われていない．「旧大陸の北端ノルウェーの北岬から，南はアフリカの南端喜望峰まであい然たる平和が充満する」[58] ことが平和論者内村の願いであったし，とくにアフリカについてはヴィクトル・ユーゴのことばを引き「19世紀

において白人は黒人より人を作ったが，20世紀においてはヨーロッパはアフリカより世界を作るであろう」[59] と言っている．

各大陸の地理的条件から帰結した大陸の将来像について80年前の内村の予見はどの程度正しかったか，地人論の記事と現在の世界の状況とを照合することは興味ある課題であるが，それは後日にゆずりたい．

む す び

以上50年という歳月を隔てて公にされた2つの地理書の特色を摘記したが，これによってこの両書が，名前は同じでも，内容的にはかなり異質的であることをある程度立証しえたと思う．ギヨーは自然地理であったし，内村のは人文地理であった．もし内村の地人論が単にギヨーを換骨奪胎して書かれたものならば，半世紀という時間は空しく経過したことになる．ことにギヨーの時代から明治の中期にかけては，例の文明開化期を含み，日本では文字どおり日進月歩の時代であった．地理学においても，内村がギヨーを祖述しただけで，なにら前進していなかったとすれば，それはあまりにも悲しい事実である．しかし実際はそうではなかった．内村という天才的思想家が出現し，ギヨーさらにはリッターまで溯る目的論的地理学が一つの流れとして内村地人論を貫いてはいるが，古今東西の大思想・文学を吸収し，独自の体系をもたせ十分近代性のある地理学を日本の識者に提示した．日本人の心を世界につなぎ，日本に生れた世界の市民を作ることが彼の目標であった．

ただ内村の軌道を置いた地理学が，その後日本において順調に発達しつづけたかどうか．また日本人そのものが地人論において内村が期待したとおりの日本人になりえたかどうか，『地理学考』を『地人論』と改題した第2版の序に「日清戦争以後の日本人は余が本書に於て論究せしが如き大天職を充たすの民にあらざるが如し．然れども余は天の指明を信ずる篤し，なほ暫く余の考察を存して事実の成行を待たんと欲す」とあり，地人論刊行2年後に早くも内村は日本人に失望し，救のない悲観論に陥っている．しかしこの書物を著作してから内村はなお30数年生き延び，1930年（昭5）3月28日夢魔のうちアフリカのことを口走りながら，永遠の眠りについた．享年68歳であった．

なお筆者が内村の地人論に関心をもち，小文[60]を公にしたのち，辻村太郎博士から手厚い励ましのことばを賜わり，石田竜次郎，小堀巖両氏から関連資料を送って頂くなどさまざまの援助を頂いた．渡辺光氏を含む以上諸氏の御好意に対しこの機会に深甚の謝意を表しておきたい．

注

1. 内村鑑三に従ってここではギヨーと呼ぶ．渡辺氏はグヨーと書き，小藤文次郎博士はジョーとした．あるいはゲーオー Gēō (Americana, Guyot の項) が正しいのかも知れない．
2. 野間三郎，『近代地理学の潮流』1963, pp. 60–121.
3. 水津一朗，『近代地理学の開拓者たち』1974, pp. 1–36.
4. 岩田慶治，「カール・リッターの位置づけに関する一つの試み」，人文地理3の3．1951, pp. 27–40.
5. Marsh, Reclus はいずれも内村の地人論の参考書目に入っている．ルクリューは1851年にリッターの講義を聴き，地理学者を志したという．
6. 石川三四郎，「内村さんの思い出」，鈴木俊郎編，『回想の内村鑑三』（以下『回想』と呼ぶ），1956, p. 63.
7. 渡辺光，『地理学概論』，1977, pp. 124–125 なおこの個所に内村の地人論が1892年（明治25年）

に出たとあるのは，渡辺氏の誤認で，1894年が正しい．

8. ギヨーの書物巻末の Advertisment のなかで，アガシは幼時からの友達 (his friend from childhood) と書いているから，かれらの友情はもっと早く芽生えていたかも知れない．

9. アガシの祖先はナントの勅令でフランスを追放された聖職者であった．

10. 地理学者 Hartshorne は，ギヨーはリッターの student ではなかったにしても follower だったと述べている，The Nature of Geography, 1967（初版は1939）p. 85.

11. リッターとマルクスとの師弟関係は教育学者，元京大総長，故小西重直博士の教示による．時期は1838～40年ごろと思われる．なおドイツの Moltke 将軍もリッターの影響をうけ，多くの地理学的論文を書いたあと，軍事地理学的な戦略を立てたとハーツホーンは記している．前掲書 p. 85. 内村は「独の将軍モルトケ伯又地理学の泰斗なり」とモルトケのことを記している．（地人論，1章）．

12. ギヨーが標本採集に熱心であったので，フンボルトは彼にベルリン動物園の無料入場権 entrée を与えたという．

13. Carl Sandburg, Abraham Lincoln, the War Years, Vol. II, 1939, p. 319.

14. 矢津昌永，『日本地文学』1890，序文．なお内村は地人論Uでしばしばこの書物を引用した．

15. 渡辺前掲書およびブリタニカ，プリンストンの項．

16. ギヨーの伝記は T. W. Freeman, A Hundred Years of Geography, 1965, ほか数書による．

17. Hartshorne 前掲書，p. 85. リッターのベルリン大学地理学教授就任は水津一朗氏は1825年と記している．

18. L. C. Peltier, Geomorphology, in American Geography, Inventory and Prospect, 1954, p. 364.

19. Pierre George, Dictionnaire de la Géographie, 1970, p. 219, D. Stamp, A Glossary of Geographical Terms, 1970, p. 225.

20. C. Sauer, The Education of a Geographer, A. A. A. G., 1956, p. 288.

21. 地人論U，p. 19.

22. 筆者の手許にも岩波版全集のほか20を超える評伝・研究書がある．近くは雑誌「思想」1977，9号に東大教授石田雄氏（政治学）と高崎宗司氏の内村に関する論文がある．なお品川力，『内村鑑三研究文献目録』，1968参照．

23. 内村，「目的の進歩」(1913)，内村鑑三全集，岩波書店版（以下全集と呼ぶ）．13，p. 401.「余は始めに地理学者をならんと欲した，札幌農学校に入りし時の余はそれであった」に始まり，水産学者，慈善家，教育者，社会改良家，聖書学者と時代ごとに目的が変わったことを回想している。

24. Sauer，前掲論文．

25. 志賀重昂『日本風景論』（岩波文庫版）序文で小島烏水氏が志賀・内村が同期生と書いているのは小島氏の誤認である．志賀は日本の社会で地理学者としてみとめられた最初の人である．

26. 宇田道隆，「内村鑑三と水産学」，前掲『回想』所収．p. 134.

27. History of the Fresh Water Fishes of Central Europe, 1830年に予報を出し，39～42年に完成した．

28. 内村鑑三，「流竄録」，全集2．

29. 新島は同志社大学の創立者，上州安中の産，内村より20年早く1864年禁を犯して渡米，神学のほか，熱心に地質鉱物学を学んだ．なお津田塾の創立者津田梅子もアメリカ留学中地学に興味をもった．

30. 内村，「わが信仰の表白」(1891)，全集2，p. 139 以下．内村はアマスト大学の付近を流れるコネチカット川を愛し，石狩川とともに生涯忘れることのできない2つの大きい河であるとした．内村「秋と河」，『内村鑑三随筆集』（岩波文庫），1932，p. 211.

31. 前掲，「流竄録」，全集2，p. 114.
32. 全集2，pp. 374–382.
33. この書物のなかでも興国の1つの要素として地理が強調されている．
34. 大久保利謙，「内村鑑三とナショナリズム」，『回想』p. 87.
35. 内村はシーリー総長のことばとして，地質学を学ぶことは容易であるが，地質学を教えることは難しいと言っている．内村「後世への最大遺物」．全集 1，p. 354.
36. アガシの自然重視説をたたえた詩人ロングフェローの詩を内村は記している．（全集，2，p. 122).
37. 前掲，「流竄録」，全集 2，p. 123.
38. 明治28年6月ごろは下立売通小川西入ルに住み，9月には新町通竹屋町の便利堂中村弥左衛門宅に移っている．現在同所に内村滞在記念の自然石がある．（小原信，『評伝内村鑑三』1976, p. 191.)
39. 全集16(英文)，p. 15以下，しばらくのち内村自身これを訳し「日本国の天職」として発表した．
40. 内村，「日本国の天職」全集1，p. 163 以下．内村は「世界の日本」(1896) のなかでも同じ思想を述べ，日本は世界に対して重大な責任を負うべきだとしている．
41. 『日本風景論』は志賀重昂31歳の作，アジア人文の開発は，日本人の天職とした点は内村地人論と共通している．志賀にも全集8巻と単行本多数がある．
42. 岩波版全集20巻（1936～38）と著作集21巻（1953～55）のほか敬文館版全集53巻（1960～73）もちろん単行本多数がある．
43. デルマルクの話（1913）は単行本として刊行された．そのほかオランダ，フィンランド，中央アジア，中央アフリカについて記し，アルベルト・シュワイツェルを日本に最初に紹介したのも内村である．
44. Marion Newbegin 女史を編集者とする Scottish Geographical Magazine は内村の愛読した雑誌で，彼の著作中に Newbegin の名がよく出てくる．女史には Modern Geography など数冊の著書があるが，著者名として常に M. Newbegin を用い，日本の地理学者のなかには，男性と間違えている人もある．
45. 山桝儀市，「内村先生の思出」，鈴木俊郎編，『追想集内村鑑三』，1949，所収 p. 133. 朝洋丸船長山桝氏によれば，内村の頭には常に世界地図が展開されていたという．
46. 宮部金吾，『内村鑑三君小伝』，1932，p. 25.
47. もちろんその1つは Jesus イエスキリストである．
48. 『大塚久雄著作集』10，p. 162.
49. 渡辺，前掲書，p. 124.
50. W. M. Davis, The Physical Geography of the Lands, in Geographical Essays, 1909, p. 71.
51. T. W. Freeman, A Hundred Years of Geography, 1965, p. 70.
52. J. K. Wright, Notes on Early American Geopiety, in Human Nature in Geography, 1966, p. 250 f.
53. 前掲，Peltier, Geomorphology, p. 364.
54. D. Stamp, An Intermediate Geography, 1954, p. 1.
55. 地人論U，全集1，p. 547. 内村はここでバックルやドレーパーの所説は歴史と地理学とを混同するもので，両者の関係を論じたものでないと，明瞭に環境論を排撃した．地人論Uより12年後に出た高山林次郎（樗牛）の『世界文明史』はギゾー，テーヌ，ドレーパー (Draper, Intellectual Development of Europe) を多用し，環境論に終始している．
56. 内村は日本一英語の達人の評があった．原稿なしに英米人の集会で講演ができたのは当時としては内村のほかにはなかったと英語学者斉藤勇博士は言っている．前掲，『回想』p. 238.

57. S. B. Jones, The Enjoyment of Geography, Geogr. Rev., Oct., 1952, p. 543.
58. 内村，地人論，p. 220.
59. 同上，p. 221.
60. 辻田右左男，「地人論とその著者」，日本史研究7，1949.

summary

Since Carl Ritter advocated a new principle of geography, there appeared many books, treating the mutual relations between the earth and man. In the latter period of 19th century, A. Guyot's "The Earth and Man" was welcomed by English-speaking nations as the most conspicuous one among such books. On the other hand, in Japan Kanzo Uchimura, a brilliant Christian thinker, who had already written the famous English book "How I became a Christian", published the "chijin-ron". That was an essay concerning to the man-land relationship. Dr. Akira Watanabe, the former voting committee of Japan in the International Geographical Union, argued the Uchimura's book was merely half-translated edition of Guyot's book. The writer already had a thought that Uchimura's book was an original work conveying the new idea of geography and world-wide mission of Japanese people who are to be the advocate of the Asia and harbinger of the Europe. Surely Uchimura quoted several passages from Guyot's book and followed somewhat the Ritter and Guyot lines. But as a whole Uchimura never commented upon Guyot's geography. Comparing these two books, the writer found out the differentiation of them, rather than the identification. In adddition, the wirter worked on the lives of these two personalities.

The writer expressed in this occation the deepest gratitude to Dr. Watanabe and wants to dedicate this essay to him. And also the writer must remember the kindly helps and appreciations of Dr. Tsujimura, Mr. Ishida and Mr. Kobori toward the author's former work, "Kanzo Uchimura and his Geography" in "Nihonshi Kenkyu" No. 7, 1949.